



■白沢宿

北半分の白沢村と南半分の上岡本村で構成されていた白沢宿は、江戸時代、参勤交代の制度確立とともに奥州街道の第一宿として幕末まで賑わいました。宿内には、主に大名が宿泊する本陣と、本陣に収容しきれない時や、本陣に支障などがある際のための脇本陣が設けられていたほか、大小の旅籠屋が13軒ありました。白沢宿では、本陣が主に宇加地家に、脇本陣が福田家に設けられ、それぞれ名主・庄屋を勤めました。

現在は街道の両側に用水路が流れていますが、かつては1筋の流れが中央にあり、旅人が足を洗うほか、防火用水や馬の飲み水に使われました。



■逆木洞門

さかさぎ どうもん

度々氾濫する西鬼怒川の状態を改善するため、明治29年の洪水をきっかけに、明治30年に鬼怒川本流から2孔の隧道トンネルにより分水し、下流に新たな水路を設け従来の西鬼怒川に合流させ、安定した水流維持を図るための工事が行われました。工事には、1年5ヶ月の歳月と延べ人員23万8千人、工事費11万5千円がかかりました。

その後、鬼怒川中部土地改良事業の一環で新設された風見発電所の放水口から、鬼怒川本流をサイホンで横断して取水することとしたため、昭和42年に逆木洞門は閉鎖されました。



■五十里洪水

天和3 (1683) 年9月1日、地震による崩壊で男鹿川が堰き止められ、東西1里南北3里余りの堰止湖が出来、五十里村と西川村 (現在の五十里湖付近) が水没しました。この湖のために会津西街道の通行が困難になったため、会津藩主が水抜き工事を行いました。ついに完成しませんでした。

湖が出来てから約40年後の享保8 (1724) 年8月10日、堰き止められていた湖が長雨により崩壊して湖水が一度に氾濫しました。沿岸の村々の被害は実に甚大で、当時の宇都宮藩近辺も大きな被害を受けました。五十里洪水は、様々な民話・伝承の生まれるきっかけになりました。